



◀北広牧場の皆さん



◀北広牧場の旧牛舎は、NHK連続テレビ小説「なつぞら」の柴田牧場として昭和30年代風にアレンジされ使用された

▶ボビレックスが敷かれたベッドでくつろぐ乳牛(20年11月に北広牧場で撮影)



「ボビレックスに交換したら、牛たちがとてもリラックスするようになった」

ユーザー訪問

有限会社 北広牧場
(北海道十勝管内新得町)

カウコンフォート向上へ 牛床マット「ボビレックス」導入

北海道有数のメガファーム、北広牧場はこのほど、搾乳牛など計600頭分の牛床マットを全て、ワイビーテックが輸入・販売する「ボビレックス」に切り替えた。現地を訪ね、高野淳代表取締役導入の背景や効果を聞いた。

北海道東部の十勝管内。言わずと知れた国内最大の酪農主産地だ。19年4～9月にはNHKの連続テレビ小説(朝ドラ)で、この地を舞台にした「なつぞら」が放映された。戦争で両親を亡くした主人公なつ(広瀬すず)が十勝の柴田牧場に引き取られ、たくましく成長していく物語だ。随所に酪農家の仕事や暮らし、北海道酪農の史実がちりばめられ、一般視聴者はもとより、酪農関係者の間で大きな話題となった。

「なつぞら」は十勝管内の様々な場所でも撮影されたが、その一つが新得町の北広牧場だった。柴田牧場の新牛舎として、北広牧場の古い牛舎が昭和30年代風に飾り変えられ、なつや、酪農家役の草刈正雄、なつの育ての母親を演じた松嶋菜々子らが、牛の世話や搾乳を行うシーンが撮影された。その牛舎はドラマ終盤から一般公開され、連日、大勢のファンで賑わった。

「なつぞら」の撮影地として一気に有名になった北広牧場だが、酪農関係者の間では北海道を代表するメガファームとして知られる。設立は1996年。地域の酪農家4戸が共同で立ち上げた。共同経営や法人化は今でこそ当たり前だが、当時はまだ珍しく、北広牧場はその先駆的存在と言える。飼養頭数は現在900頭(うち搾乳牛520頭)にまで拡大しており、19年度の出荷乳量は5300tに達している。

なんて軽くて柔らかい

北広牧場は19年から、搾乳牛と乾乳牛の牛床マット計600頭分を順次「ボ

ンビニルアセテート共重合)樹脂を使用しているため、①軽量で断熱・保温効果に優れている(エア含有率80%以上)②牛が横臥・起立するときに、良好なラットホルドができて滑らないため、飛節や乳房の損傷、蹄病が減少する③水分を弾くため、衛生的で雑菌の増殖を防ぐなどの効果がある。

高野代表は社内会議でボビレックスを提案。一気に取り替えると牛の負担になるし金銭的な負担も大きくなるため、19年から3回(1回200頭分)に分けて交換していった。

快適に過ごせるように

「とてもリラックスしている」

牛床マットをボビレックスに変更した後、高野代表は牛たちの動きや表情を見てそう感じたという。「寝転んで反芻している時間が増えた。立っているのは、エサを食べるか、水を飲むか、発情している時くらい。冬も暖かで快適そうだな」と話す。

乳牛の飼養管理を巡る世界的な潮流は、快適でストレスなく過ごせる状態、つまり「カウコンフォート」を重視する傾向が年々強まっている。いくら乳牛改良によつて遺伝的能力の高い牛群をそろえ、高品質な飼料を給与しても、牛舎内の環境が悪く、牛たちが快適に過ごせなければ、その能力を最大限引き出すことはできないためだ。

なかでも牛床マットは、牛たちが最も長く過ごす場所であり、かつ体に直接触れるものだから、ストレスを感じるよ

ビレックス」に切り替えた。高野代表は「それまでは別のマットを使用していたが、満足できる製品ではなかった。数年でベタンとなつてしまい、その凹んだ部分に漏乳が溜まつてしまうことがあった。表面もすぐに毛羽立つので、そこにふん尿が残つて雑菌の温床になっていたのではないかと心配だった。実際、乳房炎が増えてきていたし、寝起きも悪かった。牛にとつてはストレスの溜まるマットだったのではないかと話す。

そこで目を付けたのがボビレックスだ。それまでのマットがいまいちだったこともあり、高野代表はワイビーテックの営業マンにたびたび相談していた。「実際にサンプルを触らせてもらったら、空気がたくさん含まれていて、びっくりするほど軽くて柔らかい。こんなマットがあるのかと驚いた。次はこれが良いと考えていた」という。

ボビレックスは、デンマークのREXEL A N E U R O P E社が製造する牛床マット。日本ではワイビーテックが輸入・販売している。ポリエチレンよりも柔軟性・弾力性・耐久性に優れたEVA(エチレ

うでは個体乳量や繁殖成績に悪影響が及ぶ。また、牛床マットが非衛生的な状態だと乳房炎の原因にもなる。実際に北海道の酪農現場では「いくら対策を講じてマイコプラズマ乳房炎を抑えられず困り果てていたが、牛床マットを変えた途端、克服できた」との声も少なくない。

高野代表は「牛たちのリラックスした姿を見ていると、ボビレックスへの変更は間違いではなかったと確信できる」と強調する。

次は従業員の負担軽減

昨年末までに600頭分の牛床を全てボビレックスに交換し、カウコンフォートの向上を図った北広牧場。今後は従業員の労働負担軽減に向け、搾乳ロボットの導入を検討している。

高野代表は「現在使用しているヘリンボーンパーラー(16頭W)は牧場設立と同時に導入したもの。すでに更新時期を迎えているし、省力化と規模拡大の両立を図るには搾乳ロボットが有効な選択肢だ。北広牧場の将来に向け、検討していきたい」と意気込む。

また、同牧場はソフトミックスや低温殺菌牛乳、飲むヨーグルトの製造・販売なども行っているが、こうした6次産業化の取り組みもさらに推し進めていきたい考えた。

先陣を切つて共同経営体へと移行し、地域の酪農を牽引し続けてきた北広牧場。これからの挑戦にますます目が離せない。

高野淳代表取締役

